

「わたぼうし新聞」(仮称) 第2号

発行者 羽咋市中央町フ169-2

羽咋公民館内

「わたぼうし友の会」(仮称)

発行日 昭和60年(1985年)3月15日

時代遅れの僕たちへ

すれちがいざま僕をみつめて  
泣きだしたあの人は  
揺らめく心押さえきれずに  
知らぬ間にあふれでるのだろう  
そこに僕を見てる  
ひとつのいまがある  
弱い人だと決めて哀れむいまがある  
三日逢っていない君に逢いたくて  
ガラガラとさまよっていたと知ったら  
あの人は時代遅れの涙を笑うだろうね  
テレビに映る人のいきざま  
眺めてはほほをぬらす  
揺らめく心かくしきれずに  
ふたりともあふれてきたよ  
そこにひそかにおそう  
ひとつのわながある  
涙流しただけですべてを終わらせる  
そうさいつのまにか  
とても大切なことも  
傍らに流してしまっているから  
ぼくらは時代遅れの涙に  
さよならしよう

## 各地でボランティア講座開催！！－社会福祉協議会主催－

ボランティア活動への関心が非常に高まりを見せ、様々な分野でその活動が活発に展開されています。2月より加賀・松任・金沢・羽咋・珠洲で社会福祉協議会主催でボランティア講座が行われました。羽咋市で行われた内容を例にあげますと、「石川県社会福祉協議会」常務理事・中村正夫氏の「社会福祉の現状と問題点」七尾市ボランティア協会受け入れの一年間ボランティア高橋さんの活動発表、それに点字の基本等でした。

### －お知らせ－

#### '85つくしのコンサート

- ・詩を送って下さい
- ・期 間：2月10日～3月31日
- ・応募数：1人5点まで
- ・テーマ：「今までの生活 今の生活 これからの生活」
- ・送付先：〒930-11

富山市西中野東部37

富山ボランティア会議内

つくしのコンサート実行委員会

☎ 0764-91-3283 (但し、日・火・金の18:00～21:00)

#### 国際青年年によせて (地域住民)

国際青年の年 (International youth year) は、「参加・開発・平和」を三本柱として今年スタートしました。私たち青年団も、この年を意義あるものとして、いかなければいけないと考えています。そこで、まず気をつけなければいけないのは、単なるお祭り騒ぎ的に、いろんな行事をすることに終始してはいけないということです。周囲からはおだてられ、かつての国際障害者年のような形にだけはしていけないと思います。

三無主義とも、四無主義とも言われる青年の多い中で、21世紀を担う私たち青年が、今、自分たちの置かれた立場を見つめ直し、内面的にも躍進することを期待し、今年、国際青年の年を私たちの手でスタートしたいと思います。

## 第3回七尾市ボランティア文化祭を終えて

去る、2月16日～7日に、第3回七尾市ボランティア文化祭を開催しました。年に一度の多くのボランティアの皆さんが集いあう場です。ここでは、いろいろな人々の夢や想いを持ち寄り、みんなで考えあい、語りあい、市民として自立した行動（活動）が生み出される場でもあります。

今年三回目の文化祭のテーマ「やってみんかま！ぼらんてーリング」とは、自分でできることは？今まで見過ごした問題など、歩きながら何かひとつでも持って帰ってもらおうと、会場にはポイントを置き、そのポイントごとにボランティアとは何か？ボランティア活動の原点など一人でも多くの人が「何かしなければ」「なぜだろう」と気がついてくれることを願いました。

しかし、即売コーナーだけを目的に来て、そのまま帰られる人が少なくなく、この文化祭のねらい、願をもっと広く市民に伝え、訴えなければ地域に根ざしたイベントとは、言えないだろうと反省がなされました。

これからも、今回の出会いの広場で得ることができた成果をもとに古里七尾の明るい福祉の町、共に暮らすためのより良い町にしていきたいと思っています。そして、「ボランティア文化祭」が少しずつ街の中に解けこみ、市民の連帯意識を育てていく市民運動の広がり、発展していくことを願っています。

## 団体紹介コーナー

### 七尾市ボランティア協会

七尾市ボランティア協会は、昭和58年に発足し、今年2年目を迎えました。この協会は、一般市民の皆さんが会員になって支える民間の団体で、そこに住んでいる人々のニーズに応えるために、他地域とも情報交換をしながら、ボランティア相互の連携と自主活動への援助、いろいろな事業、懇話会などの開催、活動拠点として、ビュロー（窓口）相談活動など、よりよい地域社会をめざして、ボランティア活動を行っています。人は一人で生きてゆけません。日々の暮らしの中で、疑問や思いを閉じこめていませんか？ボランティア活動は地域一人一人の活動です。あなたもいっしょにやってみませんか？

- ・例会日：月1回
- ・連絡先：〒926 七尾市三島町  
七尾市福祉センター  
七尾市ボランティア協会  
☎ 0767-53-6969

「生きるってすばらしい！！」

－田原米子さん特別集会を聴いて－ 在宅障害者

友だちから借りたテープの感想を書きたいと思います。

「生きるってすばらしい！」と田原米子さんは言い切る。私には、今までそう思えた時があっただろうかと考える。

うらやましい！

田原米子さんは、18才の時電車に飛び込み、両足、両手を失い右手（指3本）がかろうじて残り、その後、信仰に救われ結婚。そして子育ても終わり、現在は第二の人生をご主人と楽しく生きている方です。

ご自分では、死を選んだ原因として、小さいときから母親の過保護にあったのではないか。そして庇護者である母親の死をきっかけに少しずつぐれ始め、気がついた時は、生きていることがだんだん苦しくなってきた、何の為に生きているのか、何で生まれたんだろうって悩み、何もかも捨てたい、楽になりたいと思う様になり、電車に飛び込んでしまったと話されているのです。

そして、信仰という一つの転機により、「生きて居るんだ」と思ってから29年間一度も死にたいと思ったことはなく、価値観が積極思考、プラス思考になったということです。生きていることの意味、生きる目あては何か、今のままでいいのかと考える私に「特別な生き方をしなくてもいい、自分なりの生き方をすればいい。」同じ痛みを持つてる者、同じ経験をした者が助け合うことができる。こんな自分でも「だれかの役に立てる」と話しかけて下さってる様でした。

「何か役に立ちそうだ、何かいい事がありそうと思ったら積極的にとじこもっていないで、自分からどんどん行動を起こす前向きの姿勢が大事です。」としめくられていました。

一生に一度は、必ず生きていて良かったと思える時があると、田原米子さんのように「生きるってすばらしい」と心から言えるようになりたい。

田原米子さんの自叙伝を述べた本が出版されています。

「生きるってすばらしい」 田原 米子 宇津林 登著  
講談社 980円

## テレビニュースの取材から

「かがのと630」キャスター

“この原稿内容は、2月13日にNHKの「かがのと630」で放送されました石川県金沢市立富樫小学校と県立ろう学校の児童生徒の交流の様子を取材された630キャスターの原稿をいただきました。”

たった3日間の取材でしたが、子供たちの交流は、私の中に「障害を持つ」という現実の重さと、その中で何か明るい希望のようなものを残してくれました。その一端を書かせていただこうと思います。

私たちの暮らす社会そのものが、健常者・身障者が一緒に暮らしている中で、今の子供たちは思いやりがない、などと言われます。本当にそうでしょうか？障害や何らかのハンディキャップを持つ友だちがいないという環境を、子供たちは与えられています。「お年寄りやハンディを持つ人を見かけたら、何か助けてあげましょう。」と聞かれた子供たちは、いざ実際に目のあたりに接した時に「どうしていいのか、わからない」というのが本当のところかもしれません。

せいぜい席を譲る位のことしか具体例を習っていなければ、それをすれば良いのだと思う子供ですから……。 「思いやり」というのは、教え習うもの、育てゆくものだと痛感しました。子供たちは一緒にすれば、自然と互いのハンディを超えようと懸命になる。大人の私の中にあつた「気がね」を恥ずかしいと思いました。身近に接することによって、互いを思う気持ちは育まれていっていた様でした。

しかし、現場の先生方の実践としては、(ろうの子供たちの場合)コミュニケーションに必要な充分な発声、読み取りは、やはり特別な時間をさかなければならず、授業そのものを一緒にした場合は、劣等感、優等感という逆の効果をもたらしかねないということでした。

盲・ろう・養護の共通の哀しみは、家に帰ると、その地域に学校の友だちがおらず、地域への解け込みを一層困難にしていると思いました。学校単位の交流では、健常児にも、障害児にも(一緒に生活していくという点では)一緒に地域社会に生きていく上では、先に書いた問題が、尚考えられるべきでないかと思っています。

### 募集します！

編集部では障害児(者)と健常児(者)の交流、地域への解け込みについて、皆さんの意見や考えをお待ちしています。

## 心と心のかけ橋 地域住民

お年寄りの方のためにボランティア

体の不自由な方のためにボランティア

ボランティア、なんと暖かく感じる言葉でしょう。暖かく感じると共にとても難しい言葉のような気もします。私も私の友人もボランティアに登録しました。登録はしたものの、実際にボランティアとして役立つのでしょうか。

役立つというよりも自分自身のためにも、役立たせてもらっていると言った方が今の私の気持ちです。20年も30年も昔は奉仕と言ったと思います。何十年昔から奉仕をしている方も、今はボランティアと言葉が変わっても、「心と心のかけ橋」は変わることはありません。

私も、そのボランティアの中の小さな一人ですが、元気で過ごせる間は、感謝と共に名だけでなく、一生懸命にお手伝いしようと心に決めています。

## 事務局だより

春の足音がそこまで聞こえてきます。みなさんいかがお過ごしでしょうか？ ようやく2号の発刊となりました。さて、もっか掲載原稿の募集中です。詩・短歌・俳句・読者へのPR意見をどんどん募集しています。3号はテーマを設定して原稿を募集したいと思います。テーマは「私にとってボランティアとは」です。みなさんの原稿を期待しています。3号は5月下旬頃に発行の予定です。